

張してゐる。鈴木氏も「支那幣制論」に於て法幣の性格を論じ最後に法幣の今や全く瀕死の状態にある今日確固たる支那幣制確立の焦眉の急なるを叫んで篇を結んでゐる。

又静岡均氏「滿洲産業の開發過程」以下の諸篇は各々特殊の論題を掲げて何れも緻密なる研究を行つて居り傾聴すべき議論も甚だ多い。

以上讀するに及んで氣付くのは諸篇が各々研究の分野を異にするもこれらが一貫して事變處理、東亞新秩序の建設を目標としてゐることである。而もそれらが際物的でなく、常に的確なる論據に基いて科學的に論を進めてゐることである。又本書が多方面に互る研究を網羅してゐることは大陸に關する諸方面の知識を豊富ならしめ、自分は大陸文化への理解の度、頁を追つて深まるを覺えた。日支提携の叫ばれる、今日、かゝる書の公にされたことは何よりも先づ悦ばしい。

本書の紹介を了るに臨んで編者大陸文化研究會の今後の活動を祈る。(菊判五四六頁、岩波書店發行、定價四圓五拾錢)(柴田孝夫)

東洋地理思想史研究

鮎澤信太郎著

少くとも東洋に關する限り、地理學史はまだ曠野である。極く僅かの人達が、ところ／＼に美しい花を咲かせてはゐるが、それ等が一つ／＼の沃野になる爲には、まだ多くの努力が要求されるであらう。全體的な展望がなされる爲めには、あまりに不確か

な資料ばかりである。我々に殘された個々の作品は、一々綿密な検討を經られなければならない。近年々々として地理學史に關する多數の研究を發表して居られる鮎澤文學士は、このことを最もよく認識して居られる一人である。この東洋地理思想史研究に一貫する方法が書誌學的であることは、それを物語つてゐるであらう。そしてこのことが、この書の價值を一層貴重なものたらしめてゐる。

著者の「調査」が極めて周到で且つ的確であるのも、かうした態度から齎されたところであらう。詰らない揚足取りをすれば、贅語箋の撰者を公治長なるもの、如くだといつて居られるやうな、誤讀らしいと思はれる例もないではない。だが、それは枝葉に關してである。本題として取上げられたものに關する限り、豊富なる資料と精緻な考證は、その業績を充分信憑し得るものにしてゐる。だから、この書に、東洋に於る地理的思想の展開を端的に求めやうとする讀者があれば、失望を感ずるだけだらう。それは鮎澤さんにとつては明日の仕事なのだ。本書の内容が比較的斷片的な研究の集成たる觀を免れないのも蓋し已を得まい。

それは三部から成立つ。第一篇上代人の地理觀察は、主として紀記に就いて語られるが、本書に於てはあまり重要な部分ではない。第二篇は、題名通り紹介すれば、「明末清初耶蘇會士が支那に紹介した世界地理書とその影響」である。こゝに集められた十四篇のうち、「利瑪竇の世界地圖に就いて」や、短文ではあるが「利瑪竇の兩儀支覽圖に就いて」の紹介などは、とりわけ有益な勞作

であらう。利瑪竇、艾儒略、南懷仁等の業績が日本の地理學にも大きな影響を與へたことは、著者が繰返へし述べて居られる通りである。この點から鮎澤さんの目は我國近世の地理學に注がれた。第三篇「江戸時代科擧者達の地理思想」がそれである。桂川國瑞、司馬江漢、本多利明、橋南谿、平田篤胤等がその調査の對象とされる。

こゝでも書誌學的方法が主として取られてはゐるが、併しこの篇で目につくのは、鮎澤さんが單にそれだけに止まらずかうした日本の先驅者達の地理思想を明かにし、その歴史的性格を把握しようとして居られる點である。問題がこゝでは洋學の側から取上げられたことも、この意味からであらうか。それはたしかに著者の研究態度の前進を物語るものだ。併し、妄評を許されるならば、著者の所論は、既に言はれてゐるこの時代の學問の歴史性を地理學の側から再認識し、それを補強する役目に止まつてゐるやうにも見受けられる。それも勿論重要なことであらう。だが、地理學史の研究が、特に、學問の歴史の上にも、又現代の地理學の上にも、何か新らしい光明を與へるものであつてもいいやうに思ふ。地理學といふものは、それに堪えるだけに古い傳統と、豊かな領域をもつた學問だからである。

かういへば、鮎澤さんは、見當ちがひの抗議だと嗤はれるかも知れない。本來歴史家である著者に、地理學を専攻した私がつけるこれは無理な註文である。いづれにしても、比較的手に入り難い雜誌などにも載せられた一群の勞作が一書に纏められて、この

やうに世に出たことは、そこから多くの恩恵を受けるであらう私だけの悦びではない。それは地理學史のみならず、廣くいへば近世日本の學術に思を致す研究者達に取つて、どうしても一度は挨拶しなければならぬ種類の本だからである。本書が成つてからも、熱心な著者は既に多數の研究を發表せられて居る。それ等が再び纏めて上梓される日を望んでやまない。締切に迫られて、匆忙の中に薙薙な紹介をしたことを、著者にも讀者にも深くお詫びする。(本文三〇五頁、圖版七葉、東京 日本大學第三普通部發行、定價參圓)〔室賀〕

A. G. Price, *White Settlers in the Tropics*, 1939, New York. (American Geographical Society Special Publication No. 23)

A. G. Price の白人熱帯移民に關する研究は既に *Geographical Review* 誌上に二、三發表されてゐるが、今回纏つた著書として出た。この種の研究は有名な E. Huntington を始め、G. Taylor 等新大陸の地理學者や、ドイツの K. Sapper 等により行はれて來たが、今 Price によつて一應體系づけることが試みられた。

此の書は三部に分れ、第一部は『白人熱帯移民問題の本質と歴史』と題し、問題の中心は白人が過去に於て何故熱帯移民に失敗を續けて來たか、現在はどうであるか、また將來に於ける究極の勝利を望み得るや否やの三點にありとなし、此の點に就いての